



SOCIETY FOR INFORMATION DISPLAY

ニュースレター

日本支部

(第9号)

発行元：SID日本支部

発行責任者：御子柴 茂生

発行日：1998年 1月16日

SID本部ではいま・・・

SID (Society for Information Display) は、会員数4250名の国際学会である。うち日本支部会員は697名。本部が米国にあるため、ホットなニュースが日本になかなか伝わって来にくい。この国際学会がどのように運営されているか、御紹介しよう。



(S.Mikoshiba)

SID日本支部長 御子柴 茂生（電気通信大学）

れてくるのを覚えておられよう。本部役員であるExecutive Committee MemberとDirectorの投票用紙である。

Directorの仕事は、本部と支部とのパイプ役である。まだ日本から米国に出張する人が少なかった時代、このDirectorは米国駐在の方にお願いしていた。しかし近年、米国が近くなつたため、在日の方が勤めておられる。

Board of Directors Meetingはやはり年3回、Executive Committee Meetingの翌日開催される。Directorの他にExecutive Committee Member、Chapter Chair、Standing Committee Member、事務局等を含んだ、総勢40名を超える大きな会議である。日本支部からSID本部に何かの提案をするときは、Regional Vice President Asiaにお願いするのもよいし、この会議でしてもよい。ただし出席者が多いため、発言しようとするときは、数人に1台おいてあるマイクを予め手元に引き寄せ、瞬時のチャンスを伺う。

Executive Committee

本部組織にはExecutive Committee, Board of Directors, Standing Committee、および事務局がある。最も中心的な役割を果たすExecutive CommitteeはSID President, Past-President（前年度President）、President-Elect（次年度President候補）、Asia、America、EuropeそれぞれのRegional Vice President、Treasurer、およびSecretaryの8名で構成される。

この委員会は1月のDisplay Manufacturing Technology Conference、5月のInternational Symposium、および9-10月のInternational Display Research Conferenceに合わせて年3回開催され、重要案件は全てここで、たっぷり時間をかけて審議される。したがってこの委員会は通常、真夜中の12時を過ぎないと終わらない。気の抜けない会議だけに、時差のハンディのある日本代表には、眠気と闘う御苦労が忍ばれる。Regional Vice President Asiaは、1992-93年が小林駿介先生（山口東京理科大）、1994-95年が鈴木忠二先生（国際基板材料研究所）、1996-97年が内池平樹先生（広島大学）である。当然のことながら、今後日本以外の国からも選出される可能性もある。

Board of Directors

SIDには23の支部があるが、それぞれの支部にDirectorがいる。支部は基本的には国別に設けられるが、米国は会員が広い面積にちらばっているため11の支部に分かれれる。

またヨーロッパは、米国／アイルランド、フランス、中央ヨーロッパ、ロシア、ベラルース、およびウクライナの6つの支部に分かれれる。日本支部のDirectorは、岩本明人氏（東芝）である。毎年1回、本部から全会員に直接投票用紙が送付さ

Standing Committee

SIDには、次の常置委員会があり、それぞれ数名程度の委員が必要に応じて活動している。

- Academic：会員増対策、新企画、支部創設マニュアル作成。今回、全学生の学会参加旅費の補助を検討したが、学生数が多くなるため廃案となつた。現在は5月のInternational Symposiumで登壇する海外からの学生のみに、1000ドル程度の補助が与えられている。（貧乏な大学の教官には、大変助かる。）

- Archives：SID出版物管理、1998年5月のInternational SymposiumのProceedingsは、CD-ROMでも発売する予定。

- Bylaws：会則見直し。今回は、学会に対して明らかな不利益を与えた本部役員の罷免について議論された。同様なことを各支部役員に対しても検討するように要求されているが、全員がお忙しい中をボランティアで努力していただいている日本支部には、当分の間必要ないと考える。

- Chapter Formation：新支部創設。最近、香港支部、テキサス支部、および米北西太平洋支部の3つが誕生した。

- Communications : 広報
- Convention : SID主催の学会運営。今後のSID International Symposium開催予定は、

1998年5月17～22日 Anaheim
論文申込期限：1997年12月1日

1999年5月16～21日 San Jose

2000年5月14～19日 Long Beach

2001年6月3～8日 San Jose

2002年5月19～24日 Boston

2003年5月？日 San Francisco

である。開催場所が固定化しており、遠方よりはるか来たる客人に對しては、新しい街に接する楽しみが少ない。これはSymposiumと併設される展示会が大掛かりになってしまい、受け入れることのできる会場が少ないためである。今後のIDRC (International Display Research Conference) 開催予定は、

1998年9月28～10月1日 Seoul
論文申込期限：1998年4月10日

1999年9月7～9日 Berlin
論文申込期限：1999年3月1日

である。SIDの主催する学会には、他に11月の Color Imaging Conference、同じく11月のSceince and Technologies of Display Phosphors、および1月のDisplay Manufacturing Technology Conference がある。

- Definitions and Standards : 表記標準化、ISO (International Standards Organization) 、IEC (International Electrotechnical Commission) 、VESA (Video Electronics Standards Association) との調整

- Honors and Awards : Jan Rajchman Prize、Karl Ferdinand Braun Prize、Johann Gutenberg Prize、Lewis and Beatrice Winner Award 、Fellow、およびSpecial Recognition Award受賞者の選考。毎年日本から多数の受賞者を出している。1997年度は全12名中、6名が日本からの受賞であった。日本支部会員が全体の1/6であることを考えると、喜ぶべきことではある。ただしこのAwardは、国旗の数を争うオリンピックではない。受賞に値する方々が見落とされているのではないかと、日本支部は海外の方々も積極的に推薦している。この考え方は、本部でも評価されている。

- Intersociety : 他学会との調整
- Long Range Planning : 長期計画、SIDが主催／共催する学会に対するSIDの義務と条件。発展途上国に対しては、複数人で1人分の会費を分担する制度を設けた。前回はSIDの在り方について小林駿介委員の御提案により、ハード寄りの学会になりすぎていなか、という議論をした。

- Membership : 会員管理
- Nominations : Executive Committee Member候補推薦
- Publications : Information Display 誌を毎月刊行、Journal of SID を年4回刊行
- Office Liaison : 事務局の能率化電算化
- World Wide Web : home page管理
- DYIA (Information Display誌主催) : Display of the Year Award (この1年間に発売された、勝れたディスプレイに与えられる) 、Display Product of the Year Award (この1年間に発売された、ディスプレイを構成要素として用いた勝れた製品に与えられる) の選考。

予・実算

収入の規模は年額3.7Mドル、1ドル120円とする約4億円である。このうち69%がInternational Symposiumなどの会議参加費、21%が出版物代金、7%が会費である。

最近数年間は黒字が続いている。

Secretariat

上記数々の活動を支える縁の下の力持ちが、事務局である。Los Angeles郊外のSanta Ana にある。手紙の発送から会議運営まで幅広く学会の運営を行なっており、日本支部も直接的に大変お世話になっている。

SID日本支部会員関連行事予定

1月19-23日	Display Works '98, San Jose, Calif.
1月29-30日	発光・非発光合同研究会 金沢工大
2月 3-4日	視覚と画質および一般合同研究会 NHK札幌
2月 13日	SID '98 Late-News Paper ペ切
3月 6日	表示記録用有機材料デバイス研究会 機械振興会館
3月 11日	CIC, STDP, DMTC 合同報告会 機械振興会館
3月 18日	エレクトログラフィ研究会 東京
4月 10日	Asia Display '98 投稿申込ペ切
5月17-22日	SID '98, Anaheim, California
7月 1日	IDW '98 投稿申込ペ切
7月 初旬	SID '98 報告会
7月19-24日	ILCC (国際液晶学会)
8月 31日	Asia Display '98 Late-News Paper ペ切
9月28-10月1日	Asia Display '98, Seoul, Korea
10月13-15日	液晶討論会
10月 16日	IDW '98 Late-News Paper ペ切
11月 中旬	Asia Display '98 報告会
12月 7-9日	IDW '98 神戸国際会議場

(注) 当初4月23-24日に中国の西安で開催予定だったASID5は中止になりました。現在のところ、7月の最終週にマレーシアで開く方向で検討されています。

以上、支部で把握している分を掲載しました。

IDW'97の参加レポート

中嶋秀樹 (NTT)

今年で第4回目となるIDW'97 (The Fourth International Display Workshops) が、11月19日から3日間の日程で名古屋国際会議場で開催されました。IDWは1994年にASID'94(日韓台情報ディスプレイ合同研究会)と連結して初めて開催されました。第2回目は1995年にAsia Displayと連続する形で開かれています。これらの始めの2回は招待講演のみの構成でしたので、IDWとは‘ディスプレイのセミナー’との印象を持たれた方も、当時は多かったかと思います。しかし、IDWの本来の主旨は、世界のディスプレイ産業の中では日本勢が相当部分を牽引しているのに対して、表示に関する国際学会であるSID主催のIDRC(Asia Display)が、アジア地域では僅か3年に一度しか開催されないという点にあります。しかも日本国内での開催となるとさらに頻度が少なくなるという状況を見て、何とか日本国内でディスプレイ全般を扱う国際学会を毎年開催する方法はないか、ということから発案されたと聞いています。

この要請に対して応えるべく、第3回目の神戸におけるIDW(AM-LCDと併催)からは、一般投稿も可能になりました。このような、まだ歴史の浅いIDWの生い立ちのため、初期の参加者こそ203名程でしたが、年を経る毎に参加者は増加し、2回目以降それぞれ674名、756名と盛会になって来ています。そして今回の4回目では、全くの単独開催にも関わらず、890名の参加を集めました。これはSIDの参加者2000人と規模を比較しても決して見劣りしない状況です。また、発表論文数でも合計221件とSIDの300件に近い規模になりました。

IDW'97が開催された名古屋国際会議場は、名古屋市の中心街からは少し離れた東海道線の金山駅の近くに位置し、隣に接する熱田神宮とともに広大な公園地域の中にありました。施設もまさに国際会議場という名に相応しく、かなり立派な会議場でした。IDW'97はこの設備の約半分を使って行されました。もっとも、同時通訳設備を備える国際会議室やメインの白鳥ホールなど、主要な設備はIDWが占有しましたので、実質的には貸切り状態でした。ただ、広い施設のため、4つの会場に分けて行われたセッション間で行き来するのが大変、という贅沢な悩みはありました。会議自体はゆったりとしたスペースの中で落ちついて行うことができました。

会議の構成上は、10のワークショップが主体的に内容をアレンジする方式になっていました。そして、共通なセッションとして、初日の朝にKeynote AddressesとInvited Addressとが組み込まれ、国際会議の雰囲気を一気に高める演出になっていました。トップのKeynote講演は、郵政省の鈴木氏による「情報通信政策」についてでした。通常、報道されている政策内容よりも突っ込んだもので、ここまで構想を先取り公開して良いのだろうかとさえ思われる内容でした。これに続くKeynoteは東芝の竹中氏による「CRTの反撃」をテーマとしたもので、“100年間の王

座はそう簡単に新参者の敵(FPD)には譲れない”という主張で熱弁を振られました。なお、Invited Addressesは初日の他、2日目のNight Sessionとしても行われました。

各Sessionではプログラムがワークショップ毎に企画されたため、それぞれにInvited Speakersやトピックスの設定にもかなりの特徴が出されていました。これはWorkshopとしての活動が効果的に出せた良い例かと思います。さて、講演の内容では招待講演が合計53件で一般講演が158件でしたが、これらのうち海外からの投稿が83件と、国際学会としての知名度もかなり高くなっているように感じられました。参加者の構成から見てもこの傾向は明確に出ていて、IDWへ参加された方の1/4は海外から足を運ばれた方々でした。

講演はOralとPosterに振り分けられて行われましたが、どちらでも活発に討論が行われていました。ただし、Poster Sessionが3日間とも午後に行われ、特に2日目に集中していたために、Oral Sessionと掛け持ちで参加・聴講された方には、かなりタイトなスケジュールになってしまったようです。

展示は昨年もありましたが、今回はかなり広いスペースを会期中継続して使い、42の団体・企業を集めて展示会が行われていました。CRT発明100周年ということでCRT Workshopが特別企画として、普通なら博物館でしか見られないような歴史的な貴重品を出展していたのが、特に目をひきました。

Poster論文に関しては、Outstanding Paper Awardsということで合計9件の論文が選考されて、最終日にプログラム委員長の内田先生より表彰を受けました。また、初日のOpeningの中で、Display研究の発信地としてIDWをこれだけの規模に育て上げた立役者である、小島氏(大日本印刷)、堀氏(東芝)、そして雨宮氏(ザ・コンベンション)3名の方に感謝状と記念品の贈呈が、組織委員会から行われたことを申し添えておきます。

最後になりますが、既に次のIDW'98の開催に向けた準備が着々と始まっています。IDW'98の開催地は、1年ぶりに第3回目の会場となった神戸の国際会議場に戻り、12月7日から9日までの3日間の会期予定で開催されます。直前の9月末にAsia Display(IDRC)がソウルで開かれますが、今年のIDWの勢いを見ると相乗効果こそあれ、IDRCに隠れて影が薄くなるようなことは決して起きないと信じています。さらに、IDW'99についても仙台の国際センターで12月1日から3日間の開催とすでに決まっていますし、今やIDWが世界中に広く認知されるようになり、まさに発起時に目指した、「毎年」、「日本で」、「Display全般の」国際会議をという主旨が、着実に根ざしつつあると強く感じられます。SID共々、Display分野の国際会議の益々の発展を心より願って、IDW'97のレポートを括らせて頂きます。

IDRC'97 報告

川上 英昭 (日立)

IDRC'97 (17th International Display Research Conference and International Workshops on LCD Technology and Emissive Technology) は、1997年9月15-19日の5日間、トロント(カナダ)で開催された。参加者は約500名であったが、約160件の発表論文に対し、活発な討論が行われた。

IDRC'97では、招待講演からなる4つのシンポジウムを2日(初日と最終日)と一般講演を主として3日間、計5日間のプログラムであった。

初日のAM LCDでは、a-Si TFT LCD-2件、IPS TFT LCD-1件、CMOS-based AM LCD-1件、Poly-Si TFT-5件であり、トピックスを紹介した。Passive LCDs & Technologyでは、双安定LCD (FLC,BTN) 2件、STN LCD (駆動方式) 3件、フィルム、プラスチック技術3件であった。最終日のOrganic EL,LEDでは、デバイス-4件、安定性他-3件。この中で、T.Tohma (東北パオニア) からOrganic ELの製品化('97/10)が報告された。FEDでは、デバイス-3件、駆動-1件であった。

9/17(水)午前のプレナリー・セッションでは、Keynote Addressとして、J.Hund (President/CEO, Planar System) から、Planar SystemのTFELについて1983年頃からの歴史が語られた。Invited Addressでは、M.Schadt (ROLIC,スイス) から、コレステリック液晶を用いたプロジェクション用液晶デバイスについて報告された。9/18(木)朝のPlenary Invited Addressでは、Y.Yamaguchi (三菱電機) から、プロジェクションTV,CRT, LCD等を用いた屋外大画面表示等の事業と技術についての講演があった。

一般講演を主とした3日間(9/16-18)は、米国でのIDRCの伝統を守ってシングル・セクションで開催された。このため、専門以外の分野の聴講が可能であり、全体を通して、じっくり内容を把握できるようなプログラムと言ってよい。Advance ProgramとLate News Program及び論文集から、表に分野別論文数をまとめた。



(H.Kawakami)

プログラム委員会では、論文数約160として、以下のような見解を発表した。IDRC'94(米)と比較して、論文数は+31%、IDRC'91(米)に対し+135%。IDRC'82(米)から、論文数の増加率は+10.4%/年。1970年から1982年までの増加率が+1.7%/年。地域別、国別に見ると、U.S.の論文数は総計の29%(IDRC'94では34%)、欧州は18% (22% in '94)に減少した。日本も31% (34% in '94)へ減少。一方、アジア(日本を含めて)は51% (45% in '94)に増加した。韓国は12%、他のアジア(日本、韓国除く)は8%であった。日本を除く、アジアの割合20%は欧州の18%を上回った。

今後のIDRCの予定は次の通りである。

Asia Display'98	Euro Display'99
Sept.28-Oct.1,1998	Sept.6-9,1999

Sheraton Walker Hill Hotel	Maritim Hotel
----------------------------	---------------

Seoul,Korea	Friedrichstrasse,Berlin
-------------	-------------------------

Asia Display '98は、日本以外での初めてのIDRCになり、ソウルで開催される。Abstract/Summaryの締切は、'98年4月10日である。その成功が期待される。

L	AM LCDs	a-Si TFT LCDs p-Si TFT LCDs Microdisplay (CMOS-base) Others	13 12 2 2	93
	Passive LCDs	STN LCDs FLCD Others	9 7 3	
C	LC Tech./Alignment		8	
	LC Modeling,Measuring		7	
D	Reflective LCDs		14	
	Novel LCDs		2	
E	LC Materials	Liquid Crystals Color Filter Backlight Polymer Network Others	1 2 2 5 4	
	Projection Display	LCLV Projector Others	3 4 1	
	Novel Displays		3	3

会員満足からのおしらせ

[入会・更新のご案内]

- 12月20日現在のSID日本支部の会員状況をお知らせします。
- 日本支部会員 697名 (内学生13名)
- 年が変わり会員更新の時期が近づきました。更新のご案内と会費振込用紙を2月頃に各会員に送付しますので、更新手続きをよろしくお願いします。なお維持会員(Sustaining Member)につきましては、下記の通り入会・更新の手続きが変わったのでお知らせいたします。

(1)個人会員

日本支部に直接、更新の手続きをされるようお願いします。

[年会費] 正会員: 8,000円/学生会員: 1,000円

(2)維持会員 (Sustaining Member)

SID日本支部ではSID本部との話し合いの結果、これまで直接SID本部にお支払いいただいている維持会員の会費をSID日本支部に円でお支払いいただけるようになりました。維持会員の皆様には、これまで700\$/年間を直接SID本部へお支払いいただいておりましたが、SID日本支部へは為替レートの円安傾向を勘案し、支部運営費を上乗せした120,000円/年間をお支払いいただくようになりました。

ます。支部運営費では、学会・研究会の運営及びご案内状送付、日本支部会員名簿発行(隔年)等を行っております。なおこれらの特典は、従来から支部上乗せをお支払いいただいている維持会員の皆様にも与えられておりました。

維持会員の皆様には、SID日本支部の運営を円滑にするためにも、ぜひご協力いただきたく、1998年度の更新時にはぜひSID日本支部へ会費をお支払いいただくようにお願いいたします。また新規に維持会員として入会の皆様には、ぜひSID日本支部へ入会申し込みされることをお勧めいたします。なお維持会員には5名の会員登録が認められる等の特典があり、この機会に入会を重ねてお勧め致します。

[入会・更新等についての問い合わせ先]

〒243-0197 神奈川県厚木市森の里若宮10-1

富士通厚木研究所 Lプロジェクト部

SID日本支部会計幹事 高原和博

TEL:0462-50-8215/FAX:0462-48-5192